

浮世一代女
野坂昭如

新潮社版

浮世一代女

定価 六〇〇円

印刷 昭和四十八年二月二十日

発行 昭和四十八年二月二十五日

著者 野坂昭如

発行者 佐藤亮一

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

発行所

〒一六二 東京都新宿区矢来町七十一番地
電話 〇三(260)一一一(大代) 振替 東京〇〇



株式会社

新潮社

目次

浮世一代女

5

風流祇園八契

95

たいこもち

145

競艶花電車

189

色祭文盲御前

217

浮世一代女

浮世一代女

間口四メートル木造モルタルづくり、といえはきこえはいいが、その部分だけが、母屋から一メートル張り出していて、いたるところ虫に食われた如く、はげ落ちて木組みあらわとなり、道路と母屋のわずかな空間には、二本の八つ手繁るにまかせ、その重なる葉ずえがいわばぼろかくし、そしてモルタル造りの中央に二枚の硝子^{ガラス}ひき戸、左右眼の高さに窓があり、上は露台で、ここはアパートである母屋の、物干し台。

中は、左から延びるカウンターに椅子が二つ、右の奥へ通じる土間に粗末なテーブル、カウンター背後の棚には、埃にまみれたコップ、酒瓶、さびついたシェーカー。流しやガス台も備わっているのだが、空家に取り残された如くこしぱらく人手のふれた形跡はみえず、奥の三畳間との仕切りは、一枚の障子で、これだけは貼り替えたばかり、しらじらと薄暗い中に浮き出す。あたりの荒れ果てた様子よりなにより、一步踏みこむと、とてつもない異臭が、どんよ

り漂っていて、それは、障子の奥になお密度こく^{もど}澱み、その三疊一間は、表の乾ききった印象と裏はらに、じつとりしめりすえ果てていた。

まず眼に入るのは、くらがりだから花片、いや雪のようにさえみえる、ひきちぎった綿屑^{わたくず}、それに取りまかれて、敷きっぱなしの、固そうな敷布団、布団をまたいでちいさな卓袱台^{ちゃぶだい}、ごみ入れたままくにやりと曲ったビニールの袋。壁には赤く縁どられたり、安っぽい装飾の鏡が三つ、その横に古ぼけた女の写真画^{がびよう}鋏^{きり}でとめられ、釘^{くぎ}にひっかかった丹前と小紋風の模様あしらった白絹子の着物、そして、卓袱台から障子にむけて、脛^{すね}を半ばあらわにした二本の脚が突き出され、その足の甲はむくんでいて、表面になめくじ無数にはいずった如き、紋様がある。壁に頭をもたせかける形で、首に白いソックスを巻きつけ、露川たづとって七十三歳は、何の苦悶の色も残さず、死んでいた。すぐ横に倒れた花瓶、綿屑の上に白い百合が二本、大輪の花そのまま、あざやかに宙にうそぶき、さらによくみれば、綿屑は、すべてたづの、便を始末したもので、その形跡がみえる、いや、敷布団の、妙に固い感じも、半ば垂れ流しのこわばりで、甘ったるい百合の匂いと、糞便のそれが混じり合い、さらに脂粉の香りが加わる。たづの全身、まるで粉をかぶったように、白く装われていた。

いたるところに、クリーム、パウダーの容器ふたのとれたままころがり、棚の上にも、びっしりと化粧品がならんで、神棚の神燈のごとくみえぬでもなく、いずれも同じメーカーの製品。

いかにもぞんざいなふうに、茶碗、箸、福神漬、醬油瓶おさめた水屋の、抽出しに残された二千円少しのほかは、この化粧品がたづの全財産といつていい。

検屍に当った係官は、見るかげもなく痩せこけた体の、白い色どりが、実は白粉で、しかもその空瓶のレットルをみれば、舶来高級品であることにおどろいたが、さらに性器にまで紅がさされ、そこだけは白髪一本ない陰毛は油でなでつけられているのだ。骨太だが骨盤はせまく、そこから骨に皮かぶせただけのふとももが、膝にいたってむくみのため急にふくれ上り、殺されるまでもなく、重病人の徴候あらわで、長らえたとしても二、三カ月の余命に見えたが、紅さしたあたりは、そのあざやかな色割引いても、別人の如くふくよかなうるおいをもち、まず三十代の印象だった。はじめ物盗り怨恨の見込みが、やがて強姦殺人にふくらみ、被害者が女性である場合、たとえ何歳であろうと、この線は残るのだが、調べるにつれて、その死体おおうように、卓袱台がのせられていること、室内手のつけようなく取り散らかっている、それがたづ平常の暮しぶりで、特に抵抗したためではなく、金品目当てとも考えにくい、いや、痴情がからむと思われるのは、七十三歳ではあっても、殺される前夜に、たづは客をとっているのだ。

死体発見者であるアパート管理人は、またたづの店の家賃とり立てもまかされていて、ここ二月とどこおっているから、朝九時過ぎに、女の一人暮しとはいえ、常に鍵をかけぬ表の硝子戸からまず声をかけ、「いえね、中へ入るのはいやなんですよ、なんたってあの臭いでしょ」な

にしろ便の始末は常に真綿、このあたりまだ汲みとりだから、清掃員が文句をいい、しかし、いっこう聞き入れない。「しまいにや、取ってつてくれないですよ、それで」思い出すのも気色わるげに管理人口ごもり、溜めには綿がびっしりつめこまれ、雨水が流れこむと、褐色のかたまりが便器の上に盛り上って、だが、たづはいっこう気にせず、使用不能となると、裏を流れる川の畔で用を足し、それも億劫な時は、畳一枚はぐり、どうせ安普請の床板抜いて、ここに新聞でくるんだ便を捨て、^{おつく}「もうろくってんですかねえ」あまりのことに文句もいえず、見てみぬふりはまだしも、風の向きでは漂い流れる異臭に、そっぽむいて我慢をし、もっとも港町の、場末に近く取り残され、スラムにかこまれた飲み屋街、そう潔癖なこともいってはいられぬ。とにかく出来ることなら、外気の通う所で談判をと、管理人返事を待ったが、常ならずぐと起き出すはずが、いっこうその気配なく、鼻つまんで中に入って、障子引きあげ、すると眼下に、えらく大きな足があって、いささか業腹のまま、^{ごうばち}ゆり動かすと、ひんやり冷たい、「いやなもんですよ、さわっちゃったんですからねえ」管理人同情求める如く、警官にいい、しかしとり合われぬと知って、掌をズボンにこすりつつ、「死んでるって、すぐわかったけど、まさか殺されたとは気がつきませんでね」ようやくこれで厄介払い、だが、親族縁者どこに連絡していいものやら、女房につげると、おどろきもせず、一人のぞきにいて、首にまきつく白いものを発見し、警察に届けた。

たづの店は、「こま子」といい、バーと看板あげて十年近く、だがこの半年ばかり、気紛れな商売で、掃除打ち水はもとより、仕入れもいい加減、気が向くと客の顔みてから酒屋へ走り、時には店の馴染みにその用をいいつける、「昼間っからやってたり、夜更けになつてえらい騒ぎやらねえ、でも、この二、三日はしずかだったみたい」殺されたのは、発見の十時間ほど前と推定され、その頃、特に物音もなかったという。ただし、店こそ開けなかったが、何人か出入りはあつて、いずれも港で働く労働者風、とりあえず目星をその類いにおいて聞き込むうちあつさり前日の男が割れ、たづの死を新聞で知ったか、酒に酔い、交情のいきさつおでんの屋台でしゃべったことから足がつき、四十八歳の沖仲仕だった、「なんしろ百円だもんな、はじめは二百円だったけんだよ、百円にまけてくれてな、そりやもう抱けやしねえけどよ、うめえんだから。女なんて年じゃねえもんな」東北から出稼ぎにきて、そのまま居ついたという男、殺人は否定したが、すぐ舌なめずりして、たづの客あしらい事細かに説明し、「俺だけじゃねえさ、婆さんに世話になった野郎はよう」酒は切らしていても、男がもちかければ、人目のあろうとなかろうと、すぐカウンターのの中に入れて、いそいそととりつき、事後の処理まで万端心をくばつて、「男のよう、精液つうのは栄養あんだって本当け、婆さんよく胸おっぴろげてよ、娘みてえだべつてよう、いばつてたけんどな」それは、左の乳房で、右は二年前に、癌で切りとり、解剖の結果、再発していて、全身に転移、余命一月足らずと判定されていた。

沖仲仕にはアリバイがあり、その証言による他のたつの客にも、容疑は薄く、ただ被害者の奇怪としかみえぬ日常が、調べにつれて浮き出し、まず全身隈なく塗りこめた白粉は、死化粧などではなくて、この町に住みついてほぼ十年近い間、一日も欠かさぬならわしだったのだ。

内湯はないから、一町ほどはなれた銭湯へおもむき、顔の、眉を濃くひき、唇はみ出した紅、常人の眼からは気違いめいても、このあたりに五十過ぎての娼婦珍しくもなく、老醜ぬりこめた厚化粧にはなれている。しかも、たづの体は裸になれば、年よりはるかに若く、特に乳房は、子供産まなかったせいもあるだろうが、娘にみまごうばかり、いつも盛装に近い身なりであられ、てっとり早く脱ぎ捨てると、まるでDDTのように粉がとび散って、これは前日の白粉のはげ落ちたもの。まだらに飾られた体を、早足で湯船にむかい、そのままざんぶと入りこんで、たちまちあかりとりからさしこむ陽光に、湯の表面白く浮き出すが、いっさいおかまいなし、すつくと立って、鏡にむかい立膝でかまえると、まず一時間は動かず、体が冷えれば遠慮会釈なく湯をかぶり、銭湯主人のぼやきでは、まずふつうの十倍は費う。化粧石鹼各種とりまぜ十箇近く持ちこみ入念に洗った末、うっとりわが姿に見とれ、マッサージするように乳房をもみ、内ももをなでさすり、その姿はかなり淫蕩な印象で、体をふいてから、また小一時間、クリームにはじまり、全身にパフをたたきつけ、まったく唇に塗るのと同じく、なんのこたわりもなく、性器に紅をひき、子供のぞきこむと、しごくおだやかに笑いかけた。「そりやま

あ手前の体だからさ、どうしようも勝手だが、なんせ、あれじゃ料金十倍もらったってあわねえし、他のお客がいやがっちゃってね、婆さんが入ると、終い湯よりひどく汚れるんだから」錢湯の主人文句をつけると、べつに怒るでもなく、その分払うといい、しばらく一回につき二百円とったが、客足遠のく分にはおっつかず、ついにお断わり、すると別の湯へかわって、ここでも同じくりかえし、「五年前くらいから、あんまりお風呂に入っていないんじゃない？ 一時はトルコへ通っていたらしいけど」管理人の女房がいつて、ふだんあまり口をきかないたづだが、トルコ娘に男のあしらい方教えてやったと、うれしそうにつげ、女房にも真面目な顔で、「女と生れたら、なんたつて一度妾めかけにならなきゃ嘘だよ、妾てな気楽でいいねえ」そそのかすような口ぶりだった。

気前はよくて、機嫌のいい時、近所の四つ五つの子供に、千円札を与え、母親仰天してかえしにくるが、「いいんだよ、御祝儀なんだよ」たづうけとらぬから、これ幸いと母親がまき上げ、これもたづの気違いぶりをうらづけるもの。そのほか奇行はいくらもあって、癌の治療に病院へ通っている時、下駄箱の履物はきものいっさい持ちかえり、道を歩きつつほうり投げ、子供のようにな気占い、白い花が好きで、よく胸にかかえ、女優の如くポーズつくるかと思えば、デパートで下から上まで、一式衣服買い求め、すぐ着たいからと、駄々をこね、従業員休憩所で身ぐるみ替えて、古い着物は、「あんたに上げるよ、とつときな」あつけにとられた店員を後

に立ち去る。その襟も裾も、白粉と垢にまみれ、異様な臭気はなっていたが、癌診察した医者
は、「下の手入れはよかったね、たいていうわつら飾っていても、幻滅のことが多いし、あ
の年になりゃあつかましいんだけど、いつも清潔だったし、コロンをふりかけていたようで、
羞恥心もあってね、下半身むき出しになる時は、必ず着物でかくそうとしたな」癌再発して以
後、乳房手術の跡に潰瘍ができて、血膿に汚れ、みるみる衰えたが、たづ特有の身だしなみは
くずさず、治療うけつつ残った乳房ながめて、「こっちはとらないで置いて下さいよ、私のお
宝なんだからさあ」すでに手のほどこしような状態だったが、自分の死期など、てんから
気にしてないようにいい、しつこく何時頃、元気になるかとたずねた。

三食ほとんどが店屋もので、しかし、二年前くらいから、軒並みたづの、店に出前をきらい、
それは道ですれちがっても、吐気のするような、その体臭のせい、「ありやすかったねえ、
戸口のところに突っ立って、注文するんだけど、それだけで店中に、いやな臭いがへばりつい
ちまって、臭気どめいくら撒いてもおっつかないし、こっちは生物扱うんだから、たまったも
んじやない」寿司屋がこぼし、出前持ちも、バー「こま子」をいやがって、下げてきた容器も、
いかに見ぬもの清しとはいえ、客に出すのがはばかられたという。「どうやって食ってたんだ
ろうねえ、このあたりじゃ、村八分だったが」これは、たづの客が店へあらわれる時、握り飯
やサンドイッチを手土産にし、その他は、川っぶちの屋台の焼きそばおでんで食いつないだら